

日本認知心理学会ベーシックセミナー

日時 : 2016年6月17日(金) 13時00分～18時00分

場所 : 広島大学 東広島キャンパス 広島大学学士会館レセプションホール

プログラム

12:30 受付開始

12:50 開会の辞

13:00～14:30 「障害に対する認知心理学からのアプローチ」

高橋純一 (福島大学)

14:30～16:00 「脳計測における個人差の扱い」

小川健二 (北海道大学)

(休憩 15分)

16:15～17:45 「項目反応理論による心理尺度構成法—SAS University Edition (無償)

を利用して—」

中村知靖 (九州大学)

17:45 閉会の辞

講演要旨

障害に対する認知心理学からのアプローチ

高橋純一（福島大学）

本セミナーでは、個人差のなかでも特に障害を取りあげ、障害に対する認知心理学からのアプローチについて基礎的な研究手法を説明する。まず、障害研究に対する認知心理学の有用性について概説する。ここでは、定型発達者を対象とした障害傾向に関する個人差研究の重要性を紹介する。次に、これから個人差研究を始める際の（論文を投稿する際の）様々な注意点について思いつく限り述べる。例えば、実験参加者集団の質（偏りの問題）、個人差変数の問題（主観的、客観的）、分析方法（尺度の問題）、個人差研究における生理指標の重要性（生理基盤の重要性）、などの観点から考察する。以上を踏まえて、障害研究と認知心理学の関連について基礎的理解を深めたい。

脳計測における個人差の扱い

小川健二（北海道大学）

初期の脳イメージング研究では、特定の認知課題に対する脳活動の局所的増加を明らかにすることが主目的であり、その個人差に関しては無視される傾向にあった。近年、ネットワーク解析や多変量解析等の分析方法の精緻化、また課題とは関連のない安静時活動（デフォルトモード・ネットワーク）が着目されるに従い、個人差に関する研究が増加している。また、従来は個人毎の脳構造は標準脳上にマッピングされて分析されてきたが、近年は VBM や DTI 等によって脳構造の個人差も盛んに研究されている。本講演では、これらの脳計測における個人差の扱いについて紹介する。

項目反応理論による心理尺度構成法—SAS University Edition（無償）を利用して—

中村知靖（九州大学）

個人の能力を表現する方法として正誤判断によるデータの場合、正答率が用いられることが多いです。しかしながら、正答率は 0 から 100% の範囲に限定されるため、幅広い能力を表現することができません。そこで、正答率とは異なる指標、つまり潜在特性を導入し、個人の能力を広範囲に表現することが可能なのが項目反応理論です。また、項目反応理論では、個人の能力だけでなく、刺激や項目の特性も捉えることが可能です。本セミナーでは項目反応理論において基本的なモデルである 2 パラメタロジスティックモデルについて理論と応用について紹介します。また、大学関係者であれば無償の SAS University Edition を利用した分析手順ならびに結果の見方と解釈について解説を行う予定です。